

# 令和2年度 日本史B課題（1学期 第8回） No.1

2年 \_\_\_\_\_ 組 \_\_\_\_\_ 番 氏名 \_\_\_\_\_

## 〈注意事項〉

- ①今回プリントは4枚あります。教科書等の内容をまとめたものです。空欄に適する語句を記入したり、設問にも答えて下さい。なお、教科書に載っていない場合は図説やインターネット等を使って調べて下さい。
- ②このプリントは評価に関係します。しっかり取り組み、期限を守って必ず提出して下さい。なお提出の際はプリント4枚（左上）をホチキスでとめてください。

## 〈東アジアの動向とヤマト政権の発展〉（教科書 p34）

### （3）豪族の勢力争い

①6世紀初め（ ）（大連） → 実権にぎる

a 継体（けいたい）天皇を北陸地方（越前）から迎え、天皇にすえて、勢力拡大

☆図説 p382 に天皇の系図あり。仁徳天皇の系統は25代の武烈天皇で絶え、26代の継体天皇が新たに立てられたことがわかる

b 大伴金村の失脚（540年）→任那の4県を百済に無償で与えたとされる任那4県割譲問題（512年）が原因。百済からワイロをもらったのではないかとしてのちに問題化。

☆背景 朝鮮半島で高句麗の圧力により百済も圧迫される

→百済は任那（日本の拠点）に助けを求めた。大伴金村はその際に任那の約半分に相当する4つの県を百済に与えた。

↓

②6世紀中頃（ ）氏（大臣）と（ ）氏（大連）の対立

a 蘇我氏 I 財政権にぎる … 斎蔵（いみくら）、内蔵（うちつくら）、大蔵（おおくら）の（ ）を管理

☆ 斎蔵…神宝とよばれる神祭りなどの儀式を行う祭器など  
内蔵…皇室の財物  
大蔵…政府の財物

## 令和2年度 日本史B課題（1学期 第8回） No.2

a 蘇我氏 II 渡来人と結んで勢力拡大 ← 渡来人の支持

III 仏教受け入れに賛成

(問) 蘇我氏は何故、仏教の受け入れに賛成したのか理由を考えてみよう！(ヒント：仏教を信仰する渡来人と親しく交流することで、どんなメリットを得られたのだろうか?)

---

IV 蘇我氏の繁栄の基礎を築いた蘇我稲目(いなめ)(5世紀前半)

→当時の天皇の( )天皇の前で日本は仏教を受け入れるべき、と説いた。

→結局、天皇は仏教を受け入れる考えを支持した。

b 物部氏 … 軍事権をにぎり勢力拡大

・大連であった物部尾輿(おこし)(5世紀前半)

→ 大伴金村を追放。また、中臣氏とともに仏教受け入れに反対し蘇我稲目と対立。

### (4) ヤマト政権の動揺

① 用明(ようめい)天皇の死後、蘇我氏と物部氏の対立が表面化  
→大臣( )が大連の( )を滅ぼす。(587年)

→ 蘇我氏の専横(独裁) ☆背景…蘇我氏と物部氏の対立

② 蘇我馬子が( )を暗殺(592年)

背景…崇峻天皇は、蘇我馬子によってたてられた天皇。実権を持てなかったため馬子に対して敵意を持っていた。馬子が危機感を持ち、先手を打った。

③ ( )天皇の即位(593年)…初めての女性の天皇

→ 補佐役 … ( )王(通称:( ))と蘇我馬子

## 令和2年度 日本史B課題（1学期 第8回） No.3

(5) 政治改革…厩戸王と蘇我馬子

① ( ) (603年)

→ ( )・( )・( )・信・義・智の6つの位階を大小に分ける

(問) これを定めたねらいは何だろうか？考えてみよう！（ヒント：それまでの氏姓制度は能力と血筋とどちらが優先されていたのだろうか？）

② ( ) (604年) ☆現在の憲法とは異なり道徳的な内容

→ 制定の目的は ( ) 中心の中央集権体制を築くため

〈史料〉（教科書 p35 参照）

一に曰く、( ) を以て貴しとなし、さかふること無きを宗とせよ。

二に曰く、篤く三宝を敬え。

三、に曰く、詔を承りては必ず謹め。君をば則ち天とす、臣をば則ち地とす。

十七に曰く、それ事は独り断むべからず。必ず衆と論ふべし。

（この史料からわかること）

- 「一に曰く…」は、みんなで協力しなさい、ということ。
- 「三宝を敬え」とは、( ) を尊重せよ、ということ。
- 「詔を…必ず謹め」とは( ) には絶対に従いなさい、ということ。
- 「十七に曰く…」は物事は独断ではなく、話し合いで決めなさい、ということ。

## 令和2年度 日本史B課題（1学期 第8回） No.4

### ③（ ）の派遣

a 目的…中国（隋）の近代的な制度や思想・文化を日本に取り入れるため

- b 経過
- I （ ）年 … 隋の初代皇帝・文帝の時に使節を派遣
  - II 607年… （ ）を対等な立場で派遣
    - 隋の皇帝（ ）は激怒
    - しかし、翌年、隋の国使（ ）を日本に派遣した。
  - III 608年、留学生として（ ）、留学僧として（ ）、（ ）らが隋に渡る。
    - 帰国後、大化改新で活躍

c 史料… 「（ ）」（ ）（教科書 p35 参照）

開皇二十年、倭王あり。姓は阿每、字は多利思比孤 … 使を遣し闕に詣る。上、所司をしてその風俗を訪わしむ。

大業三年、其の王多利思比孤、使を遣して朝貢す。使者曰く「聞くならく、海西の菩薩天使、重ねて仏法を興すと。故、遣して朝拜せしめ、兼ねて沙門数十人、来りて仏法を学ぶ」と。其の国書に曰く、「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙無きや、云云」と。帝、之を覽て悦ばず、鴻臚卿に謂ひて曰く、「蛮夷の書、無礼なる有れば、復た以て聞する勿れ」と。

（この史料からわかること）

- 日本から「開皇二十年」＝（ ）年、「大業三年」＝（ ）年に、日本から使節が派遣されたことがわかる
- 文中の「使」は（ ）、「帝」は（ ）のことを指す。

（問）日本からの国書に、「帝」はなぜ激怒したのだろうか、考えてみよう！（ヒント：日本からの国書の中で、天皇と皇帝との上下関係はどのように表現されているだろうか？）

---